

「G作品」という、いわくありげな符丁が1954年、東宝の経営陣にささやかれていた。「ゴジラ」の構想は、「GIANT(ジャイアント)」の頭文字でのみ語ることが許された極秘プロジェクトだったのである。

プロデューサーの田中友幸(1910~87)はその年、元日本兵も身を投じたインドネシア独立戦争を描く、同国との合作映画を手がけようとしていた。しかし、この大作の企画は立ち消えになり、やむなく代案が仕立てられた。題して「海底2万哩から来た大怪獣」。南洋の水爆実験で太古からの眠りをさました恐竜が日本を襲うというものだった。本邦初の特撮怪獣映画を生み出すこの着想はひそかに「G作品」とよばれ、怪奇幻想小説家の香山滋が原作となる物語を書きあげた。

特撮の巨匠の円谷英二は最初、ゴジラを、1コマごとにミニチュアをわずかずつ動かして撮影するストップモーション・アニメで表現しようとした。だが、時間がかかりすぎるため断念、着ぐるみ式にした。1体目は重すぎて動かせず、上下に切り離されて下半身が大写しになるシーンで使われた(写真上)。ゴジラ映画は28本、半世紀にもおよぶシリーズになり、ハリウッド版もつくられた。



©東宝



©東宝

◆「ヒーロー」をテーマに作品を選んでいきます



「ゴジラ、日本海から上陸か!」。荒波のなか、ゴジラ岩が現れる=石川県珠洲市

重力が地球の3分の1しかないX星で、身長50尺、体重2万トンのゴジラが軽やかな身のこなしで跳びはねている。ウヒョー、ミーはキングキドに勝ったザンスよー! いたいけな幼稚園児だった私は映画館で、歓喜の雄たけびをあけている怪獣の胸のうちを以て心伝心でそう眺みとっていた。3本首の宇宙怪獣キングキドを倒したゴジラは、漫画「おそ松くん」に登場するイヤミの決めポーズ「シェー」を連発していたからだ。1960年代のまさに国民的ギャグである。961万人もの観客が映画館につめかけたゴジラが封切られてから11年後、65年の暮れに「エレキの若大将」と同時上映されたシリーズ第6作「怪獣大戦

# ミーは人気者ザンス!!

「ゴジラ」(1954年)

争」で、ゴジラはますます人間臭くなっていた。まるで人間の守護者のようにふるまうばかりでなく、これみよがしに、おちやめなヒーローきどりなのだ。「シェー」を撮ろうと言いだしたのはオヤジさんなんだよ。やってみたら受けたので、次の映画では、若大将の加山雄三が「僕も、幸せたなあ」と鼻をこするしぐさもやらされた」シリーズ第1作から12作目まで着ぐるみに入り、「ゴジラ」を演じた中島春雄さん(85)はそう語る。「オヤジさん」と親愛の情をこめてよぶのは、特撮シーンの監督をつとめた円谷英二(101~70)のことである。

「怪獣ブームでゴジラの人気がどんどん出るにつれて台本が子ども向けになったけど、そもそもオヤジさんが子ども好きだったんだ。あるスタッフが、立ちまわりで傷ついたゴジラが血を流したらどうかと言ったら、ふだん温厚な人がカンカンに怒り出た死んだらしたら子どもがどう思うか、考えたいところがあるのか」と怒鳴りつけていた」

地上に初めて出現したときのゴジラは子どもな力すくで抱きすくめ、えたいの知れない闇の奥へ連れ去る恐怖そのものだった。水爆実験で帯びた放射能をまきちらし、戦後の復興をどげつつあった東京をあつなく破壊させた破壊神だったのだ。新人でありながら、第1作の「ゴジラ」の主演をまかされた室田明さん(79)はしかし、映画の完成直後の試写を見ながら無性に泣けてしまい、うろたえたという。「ゴジラは最後、海中の酸素を破壊するオキシジェン・デストロイヤーで白骨化します。でも、ゴジラは核汚染という人類のあやまちに警告を発してきたのです。そんな罪もない生き物をなぜ、そこまで痛めつけるのかと悲しくなった」人類は、この物悲しく、あまりに巨大な被爆者に、執念深く報復されるさだめなのだ。

文・保科龍朗  
写真・迫 和義  
▲2面に続く



石川県 珠洲市



